

資料 66: 人体の損傷と衝突形態

(資料の説明)

- 「資料 66」: 実況見分調書 (平成 17 年 3 月 18 日 周東 賢吉) 添付図、及び写真から、真砂 晃の身体損傷の状態が明かである。
- 受傷位置を人体モデルに描き、仮想空間上で衝突を再現することで衝突姿勢と受傷位置の関係が明かとなる。
- 添付資料の「画像解析及び仮想空間図作成報告書」は道路図、車両図を三次元的に描き、告訴人主張の衝突形態 A 及び、飯能署が認定した衝突形態 B に於いて受傷状態が何れの衝突形態に近似するかを検証した。
- 真砂 晃は通常の走行時の姿勢のまま、回避行動を取る間も無く衝突したことが明かとなった。この現象は衝突が突発的であり予測ができない「衝突形態 A」で発生する。

添付資料「仮想空間上再現図作成報告書」

2009 年 5 月 5 日

真砂 佳典

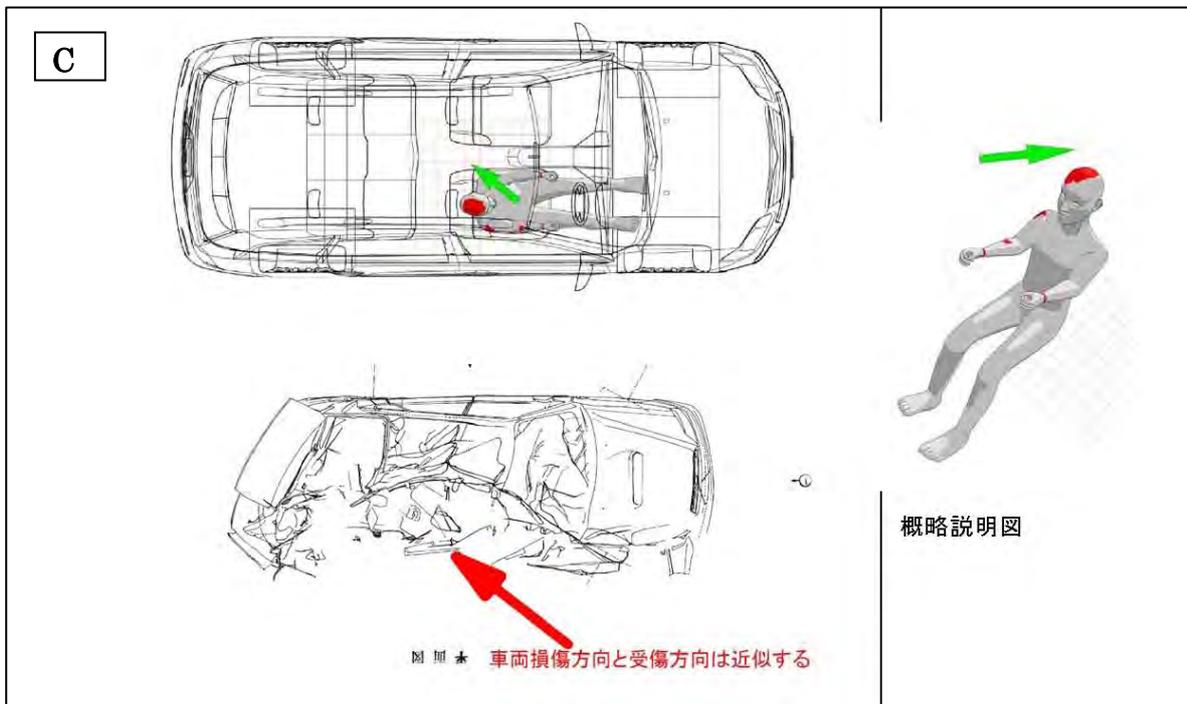
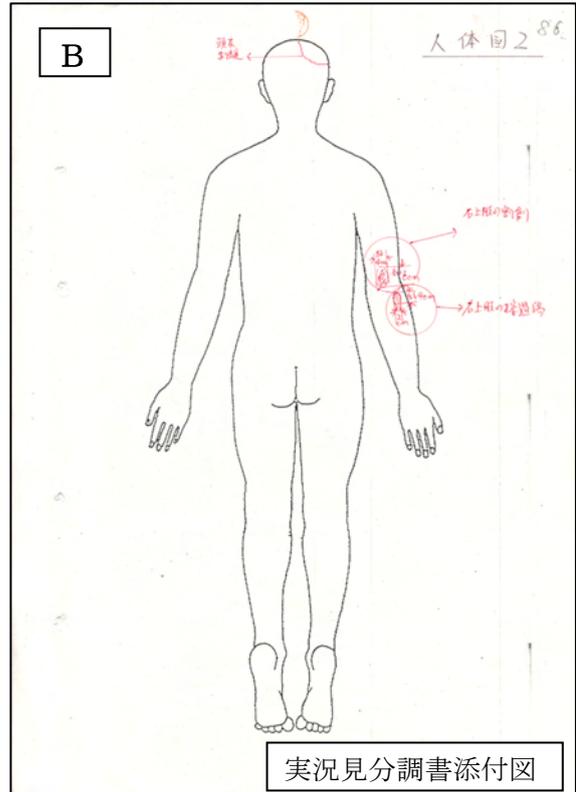
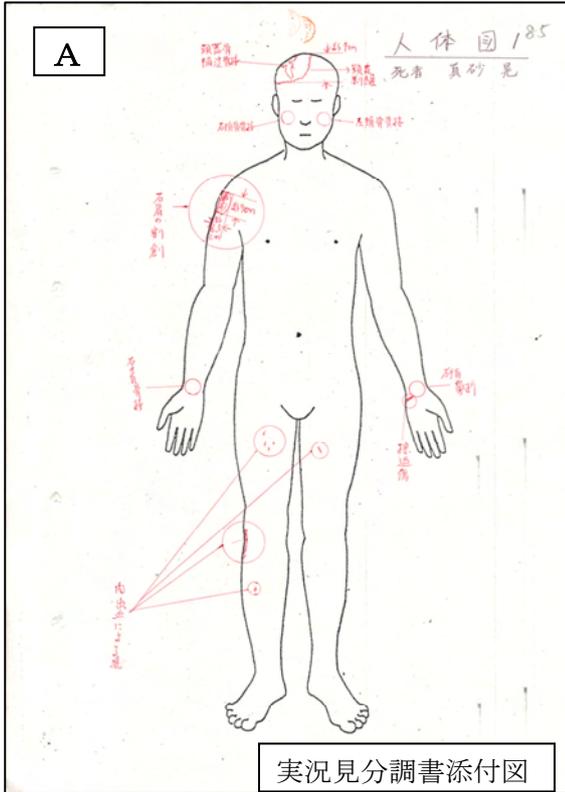


図 加 * 車両損傷方向と受傷方向は近似する

図 A、図 B は実況見分調書の添付図である。
図 C は受傷方向と車両損傷方向が近似することを示している。



(受傷位置と衝突形態)

- ・ 写真 D・写真 E は前ページの実況見分調書添付図の損傷部を人体モデルに転写した。
- ・ 写真 D は、事故現場の左 50R (半径 50m のカーブ) を通常に走行していた姿勢を形取っている。ハンドルは約 45° 左に回転するため、ハンドルを握る左右の腕は写真 D の形態と考えられる。(「実況見分調書に対する意見」資料 30、31 参照)
- ・ 両手首は骨折している。衝突時にフロントピラーが倒れ込みハンドルを押し込んだためハンドルは脱落する。その際に手首が骨折したと考えられる。
- ・ 真砂 晃の身体右の受傷位置は、写真 D の姿勢の時に右斜め前方向から駒井車が突発的に進入してきたことを伺わせる。
- ・ 写真 E は衝突を事前に予測できた場合の回避行動の姿勢を形取っている。衝突を避けようと反対方向に体をねじり、顔や頭への損傷を避けようと右腕で顔を覆い、目はかたく閉じる。
- ・ 真砂 晃の受傷状態からは回避行動を取った形跡が見当たらないのである。両目を大きく見開き、頭及び顔全面、右肩・肘・腕外側に激しい損傷を受けている。すなわち、事前に予測ができない突発的な衝突であったことを物語っている。
- ・ 「衝突形態 B」は、真砂車がドリフト状態になり、駒井車の右前角に向かい進行して衝突したとの想定である。この場合、乗員は衝突の直前であれ衝突は予測されることから、衝突が避けられないと感じた時点で体を守ろうと「回避行動」を取る。回避行動を取れば、受傷位置は大きく変わる。通常の走行時の姿勢のまま、駒井車に向かい突っ込んで行くなどは考え難い。
- ・ 衝突が事前に予測できない形態とは「衝突形態 A」である。真砂 晃は、衝突の直前まで駒井車がセンターラインを突破するとは認識できない。衝突の瞬間まで通常の姿勢で走行し続け、回避行動を取る間も無いのである。